

親のための自閉症児 早期教育プログラムの開発(3) — ポーテージプログラムに構造化のアイデアを取り入れる試み —

白幡 富夫
出村 正栄¹⁾

1 目的

前稿²⁾までの考察で、白幡は「親のための自閉症児早期教育プログラム」開発のためのてがかりを抽出し、次の3点にまとめた。

- ① 有効な強化子の発見と開発
- ② 構造化と学習のルーチン化
- ③ 課題分析および活動チャートの活用

本稿は、このうち「構造化」を取り上げ、その有効性を実証していくことを目的とする。

我々は日本ポーテージ協会の認定指導員として毎年、他の多くの指導員と事例検討会を行っている。本稿においては、検討会で出された事例の中から、「構造化」のアイデアを取り入れることによってめざましい成果を上げている例を検討する。事例をより詳細に記述し、実証性を高めるために、事例提供者の出村を本稿の共同執筆者とする。

2 構造化

構造化とは、周知のとおり、アメリカ合衆国ノースカロライナ州で実施されている自閉症児(者)のための治療教育プログラム(TEACCHプログラム)のアイデアである。TEACCHプログラム研究の日本における第一人者、佐々木正美によれば、構造化とは「意味、概念、表象、認知などの機能に重い障害がある自閉症児に、治療教育的援助を

するにあたって彼らが生活や学習の場の意味を理解し、自分に何が期待されているのかを分かりやすくするための工夫」³⁾である。

具体的な構造化のアイデアとしては、

- ① 生活や学習の場の意味を視覚的に理解させる物理的構造化
- ② 活動の予定を視覚に訴えて予告するスケジュールの構造化

の二つがある。

本稿で考察するのは、日本ポーテージ協会の認定指導員である出村が自宅を構造化して行った自閉症児に対する指導事例である。

(1) 構造化①——物理的構造化

出村は、自宅の8畳・8畳の続き和室をポーテージ発達相談室として使用している(図1)。二つの部屋は襖で仕切られており、子どもでも簡単に開閉できる。

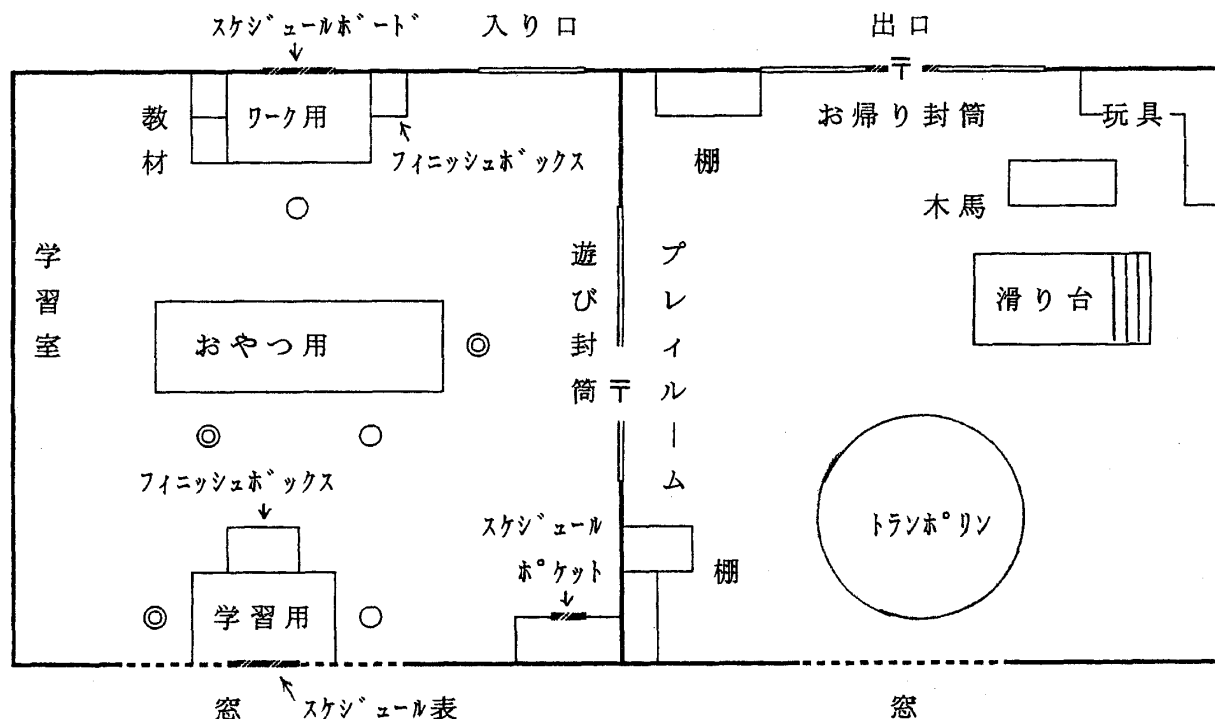
片方の部屋(以後、プレイルームと呼ぶ)には柄のあるマットを敷き、トランポリン・木馬・滑り台を設置し、棚には玩具、本、教材等が置いてある。

もう片方の部屋(以後、学習室と呼ぶ)の中央に畳1畳分の座敷机(おやつを食べる場所)、入り口近くの壁際に72cm×48cmの座卓(ワークを行う場所)、窓際に56cm×45cmのティテーブル(課題学習を行う場所)を配置した。課題学習用のティテーブルの下には無地のカーペットを敷き、座る場所は座布団の色と柄で区別した。大人用は紺色、子ども用

は動物柄である。

ちなみに、ワークとは子どもができるようになっている活動を繰り返す作業⁴⁾のことで

あり、課題学習とは新たにできるようになってほしいポータープログラム⁵⁾の課題⁵⁾を学習することである。



- : 子ども用の動物柄の座布団の位置
- ◎ : 大人用の紺の座布団の位置

図1 部屋の構造化

(2) 構造化②——スケジュールの構造化

次に、出村が工夫したスケジュールの構造化を子どもの活動の順を追って説明しよう。

学習室の入り口からまっすぐに入った部屋の奥の隅にスケジュールポケット（ポケットの数は5個）が掛けてあり、上のポケットから順に絵（あるいは写真）で区別された「ワークカード」「課題カード」「遊びカード」「おやつカード」「お帰りカード」が1枚ずつ入っている（図2）。

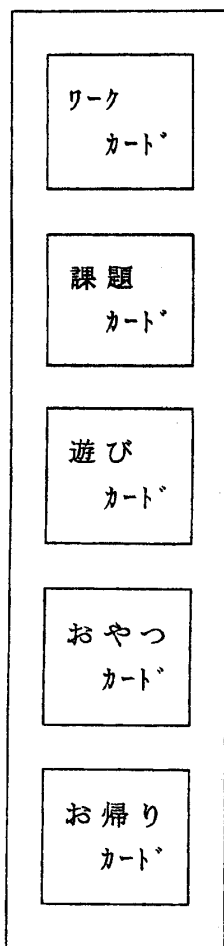
入室してきた子どもは、まっすぐにスケジュールポケットの場所に行く。一番上のポケットから「ワークカード」を取り出し、「ワークカード」を持ったままワークの場所に行く。ワークの場所の壁にはスケジュールボードが

あり、同じ絵（あるいは写真）の「ワークカード」がフックに掛かっている。子どもは手に持っているカードをボードに掛かっているカードと照合し、それをフックに掛ける。その下には、ワークの内容を示す（色分けされている）カードがクリップで留めてある（図3）。それを一枚取り、その色と同じ色の封筒にカードを入れ、その封筒が貼り付けてある箱から教材を出し、子どもはワークを一人で行う。一つのワークが終わると、教材をワーク用のフィニッシュボックスに入れる。次に、留めてある二枚目のカードを取り、同じ色の封筒が貼り付けてある箱から教材を出す。同じようにワークを行い、すべての教材をフィニッシュボックスに入れたらワークは終了である。

ワークを終えた子どもはスケジュールポケットに行き、今度は「課題カード」を出し、指導員のいる課題学習の場所に行く。ワークの時と同じ要領で今度は指導員と一緒にいくつかの課題をこなす。すべてを課題学習用のフィニッシュボックスに入れたら、子どもは再びスケジュールポケットに行き、今度は「遊びカード」を取り出す。子どもは「遊びカード」をプレイルームに通じる襖のところにある封筒（封筒には同じ遊びカードが貼ってある）に入れて、プレイルームに入り、自由に遊ぶ。遊び終わった子どもはスケジュールポケットから「おやつカード」を取り出し、そ

れを指導員に手渡す。指導員はおやつボード（透明な袋におやつが2種類入れている）を部屋の中央にあるおやつ用の座敷机に用意する。子どもは食べたいおやつを選択し（指さし）、少しずつ入れてもらいお代わりをする。袋が空になったらおやつの終了である。食べ終わると子どもは、スケジュールポケットから「お帰りカード」を取り出し、そのカードを出口の所にある封筒に入れて帰宅する。

ちなみに、親はこの間おやつ用の座敷机の所の大人用の座布団に座っている。ポータージョプログラムに基づく親との話し合いは、子どもがプレイルームで遊んでいる間に行う。



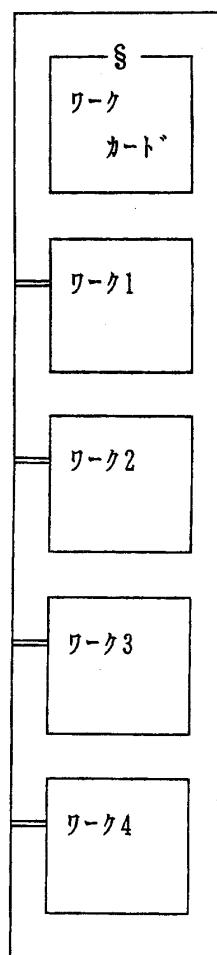
（ビニール製でカードを入れるポケットが5個ついている。

カードには簡単な絵（あるいは写真）と文字が描いてある。

子どもは各カードを一枚ずつ持って所定の場所に行く。

遊びカードまで来れば遊べるし、おやつカードまで来れば決った場所でおやつがいただける。

すべて自分で視覚的に確認しながら行動することができる。）



（紙製で、一番上にワークカードを照合してフックに掛ける。これによって子どもはワークの始まりを知ることができる。

ワーク1からワーク4までのカードは教材箱に貼り付けてある封筒の色と対応した4色のカードである。

カードの色でワークの順番と進行を自分で確認する。

色のカードがなくなれば、ワークが終わることを自分で確認することができる。）

図2 スケジュールポケット

図3 ワーク用スケジュールボード

3 事例児A君の発達プロフィール

A君は7歳1カ月の時点でポータージョ

グラムを開始した自閉症児である。養護学校に入学したが、学校では部屋から出て行ったり、予定の変更にパニックに陥ったりするこ

とが多かった。母親は学校と何度も話し合いを試みたが、なかなか改善されなかった。有意味語はないが、声を出して人を呼ぶことはできる。ミニカーはその細かな名称を言われただけで取ることができる。商品のマークを母親に音声や身振りで伝え、書いてもらうことを好む。しかし、自分で書くことはできない。

こんなA君の7歳1カ月までの発達プロフィールを母親の記録に基づいて詳述することにしよう。ただし、守秘義務の徹底のため、生年月日の日は伏せることにする。また、氏名はイニシャルではないことを断っておく。

氏 名：A

性 別：男

生年月日：1992年2月●日

家 族：父・母・本人の3人家族

生 育 歴：

母親の状況：健康良好

分 娩：熟産・安産（微弱陣痛）

出生 直後：異常なし

出 生 時：体重(2950g)、身長(未測定)、
胸囲(31.2cm)、頭囲(32cm)

乳 児 期：身体発達良好

首のすわり(3カ月)、寝返り
(6カ月)、お座り(7カ月)、
はいはい(9カ月)、つかまり
立ち(9カ月)、伝い歩き(11
カ月)、ひとり歩き(1歳3カ月)

医療・相談・教育歴および発達状況

1歳半検診：検査中積み木を高く積む。「もういいよ。」と言われても次の項目に移れず、積み木を続けた。「ワンワンは？」の質問には全く興味を示さない。

2 歳：月2回、保健所の親子教室に通う。他児や大人とは関わらず、寝そべって電車や車のタイヤ等興味のある玩具を動かしてじっと見ている。

3 歳：公立の療育センター外来に通う。精神科の医師よりセン

ター入園を勧められる。

3歳2ヵ月：療育センターへ入園。給食が食べられない。教室に入れない。通園後は泣いて寝てしまうこともある。母子通園が半年続く。その後、母子分離時に大泣きすることはあったが、一人通園ができるようになる。

4 歳：近所の知り合いの子どもたちと同じ場所にいることができるようになる。

4 歳 半：(味付け海苔を持参している)給食で食べられるものが出てくる。クラス保育で他児と同じようにできることが増える。睡眠のリズムが崩れ、深夜1時頃まで起きていることが多い。父の帰宅後必ずコンビニに行って決まった物を買うことが続く。ことばの教室、スイミング教室に通う。

5 歳：公立の保育園入園。1週間で通常の時間保育を受けられるようになる。木の玩具での遊び、レールをつなげる遊び、ドールハウス遊びを保育士とする。ミシンをかけているのを見ること、教室のシマリスに餌をあげることを好む。他児と午睡ができる。また、母親の親しい友人と二人で出かけたり、二人で留守番をすることもできるようになる。夜のコンビニ通いは、母とのドライブに変化した。

5 歳 半：学区内の障害児学級入学の希望がけない学校に何度か通ってなじむ。教室の金魚が気にいる。学童保育への受け入れも予定されていた。

6 歳：父の転勤により、転居。大き

な混乱はない。睡眠のリズムの崩れが減り、朝起きることができるようになる。大学病院の精神科に通院し始める。特殊学級への入学を希望したが認められず、県立養護学校に入学。入学後は泣くことが多かった。通学バスで通う。まもなく運動会の練習が始まり、毎日のように混乱した。教室のガラスを割る。投薬を開始する。真性包茎の手術の際、検査での採血、心電図は問題なく受けられたが、エックス線は恐がり、なかなかできなかった。

6 歳 半：学校の文化祭後ガラスを割る。雪遊びを好む。スキー旅行では父とリフトやゴンドラに乗る。そりからスキーになり、練習してとうとうゆるやかな斜面を一人で滑ることができるようになる。ホテルのバイキングでは好きな物でも食べられない。学校では給食前の手洗いを嫌がる。母がマカトンシンボルカードを提案し、使用してもらう。次の日から手洗いができるようになった。

7 歳 1 ヶ月：マカトン法⁶⁾親の会でポータープログラムを知る。

4 事例児 A 君に対する指導経過

(1) 構造化した方法による初回の指導の様子
A 君は学習室入室後、誘導されてすぐにスケジュールポケットの前に立った。初回なので、一番上のポケットにはワークカードではなく、木槌が入っている。(抽象的な絵カードより最初は具体物のほうがわかりやすいと考えた)⁷⁾。木槌を持った A 君は、それで打つペ

グの置いてあるワークの場所に向かい、自分で席に着いた。6 本のペグを木槌で打った後それをフィニッシュボックスに入れ、指示にしたがってワーク用スケジュールボードに留めてある 3 枚の色カードを 1 枚ずつ取り、順番に木槌も含めて 4 種類のワークを行った。ワークは本人が一人でできそうなものを用意した。この時のカードの色とワークの内容は以下のとおりである。

- ① 木槌で 6 本のペグを打つ。(いつもは赤カード、今回は具体物)
- ② フィルムケースに 6 個のビー玉を一個ずつ入れる (青カード)
- ③ モデルにしたがって、棒に 4 色の丸輪を色別に 4 個ずつ刺す (黄カード)
- ④ 大 3 個、小 3 個のおはじきを容器に押し入れる (緑カード)

できるだけ声をかけたり、手を出したりしないようにした。本人が特に気に入ったワークは④であった。手順に慣れていないため、途中で離席しようとしたこともあったが、最後まで興味をもって行うことができた。

ワークが終わったら、スケジュールポケットの前に誘導し、二番目のポケットに入っている物を出させた。二番目のポケットには同じ理由から、課題カードではなく型はめ用の型を一片入れておいた。課題学習用の机の上には型はめの台が置いてある。A 君は吸い寄せられるように自発的に、窓際の課題学習用の席に着いた。最小限の言語指示とマカトンサインで始まりや終わりを強調した。同時に、一つの課題が終わる毎に、課題学習用のティテーブルの上に置いてある用紙 (図 4) に一枚ずつシールを貼らせた。

また、一つの課題が終わるたびに教材をフィニッシュボックスに入れさせることによって、その課題の終了がわかる。五つの課題が終わると、再びスケジュールポケットに誘導して遊びカードを取らせ、プレイルームに通じる襖に下げてある封筒に入れてもらう。と同時に、襖を両開きにして遊んでよいことを告げる。A 君は歓声を上げて喜び、跳

ね回った。初回なのでA君の様子を観察しながら、一緒に遊ぶことにした。A君は手をつないでトランポリンをすることを好んだ。

1	(一つの課題学習が始まる毎に一つ○を書いて、その課題の開始を知らせる。一つの課題が終了したら、書き加えて花丸にし、その上にシールを貼らせる。子どもはシールによって課題学習の進行状況を自分で視覚的に確認することができる。)
2	
3	
4	
5	

図4 課題進行表

(2) ポーテージの課題の選択例と指導結果

① 社会性40「自分の要求をかなえてもらうまでいすにすわってしばらく待つ」

母親にA君にできるようになってほしいことは何かと尋ねたとき、最初に出てきたのがこの課題であった。母親にどのような場面でこの必要性を感じるかを尋ねると、「夕食後、A君は母親と一緒に入浴する。母親は後かたづけをしてからにしたいが、A君はすぐに入りたがる。せめて10分間待ってほしい。」ということであった。

そこで、「待つ」ということの意味とルールをA君に伝えるために、外出の時にタイマーを使って10秒間待つ練習をすることを提案した。つまり、外出の時に、10秒間にセットしたタイマーをA君に渡し、「ベルが鳴ったら出かけるから座って待っていてね。」ということを絵カードや身振りを交えて伝え、ベルが鳴ってから出かけるようにしてもらったのである。

タイマーのベルが鳴るまで待てば、自分の望むことができるというルールが伝わった時点で、上記の場面でもタイマーを使うことにした。この場合は、入浴を示すシンボルカードも使用した。つまり、入浴カードと10分間にセットしたタイマーをA君に渡し、「ベルが鳴ったら入浴」ということを視覚的にも予告したのである。最初の頃はタイマーを見ながら入浴を待っていた。しかし、次第に2階から玩具を持ってきて遊びながら待つようになり、やがてタイマーがなくても遊びながら待てるようになったのである。

② 社会性48「家事を手伝いたがる」

社会性68「家事の一部を20～30分ひとりでする」

この二つは指導者から母親に提案した課題である。提案理由は以下の5点である。

ア) お手伝いは同じ場面で毎日繰り返すことができる。

イ) 一定の名詞や動詞を行動しながら学習する機会になる。

ウ) 自分勝手なやり方ではなく、依頼されたやり方を繰り返す練習となる。

エ) 家事は将来の就業の基礎ともなる。

オ) 家族の役割の一端を担うことで家族に認められ、自己肯定感を育てることができる。

最初はA君にできそうな「花への水やり」と「洗濯物たたみ」とを課題とした。「花への水やり」はホースでしたがったが、じょうろ一杯分を仕事とし、帰宅後に行うことを決めただけで夏の日課として定着していった。「洗濯物たたみ」にはちょっとした母親の工夫が必要であった。スケジュールボードに「たたむ」という文字と絵を書いた紙を洗濯ばさみで留めておき、A君にその紙を取ってボードの下にさがっている封筒に入れさせてから洗濯物をたたんで籠に入れさせたのである。また、すぐに席を立とうとするので、座布団に座らせるようにしたら落ちついてできるようになったということである。ちょっとした構

造化であるといえる。

1ヵ月後、調理の手伝いとして自分の好きな物（蒲鉾・きゅうり）を切るという課題をつけ加えた。蒲鉾は実物大の図で切り方を示すことによって、きゅうりはスライサーを使用することによって可能となった。

その後、食後の食器を洗い・拭き・食器棚に片づけるという一連の家事に挑戦した。記録に基づいて、日を追ってこの課題の指導経過を記述しよう。

開始は6月18日である。この日は3枚の皿の裏表に洗剤をつけさせた。翌日からはこすって、すすいで、籠に入れるところまでできるようになった。7月5日からは茶碗を2個増やしても抵抗なくできた。7月9日に「皿や茶碗を拭くことはできないか」と尋ねると、「A君はそれを自分の仕事とは思っていないので誘ってもしようとしなさい」ということであつた。そこで、絵と文字でスケジュールカードを作ってもらった。すると、翌日から拭くことができたのである。母親の記録には、「お皿をいつもの通り洗って籠に入れておしまいにするつもりが、スケジュールカードを見て、違うことに気づき、あわてて拭き始めた。5枚できた。」とある。7月22日、大きな皿4枚と小さな皿2枚を重ねてテーブルの上に置くことができるようになった。そこで、7月27日に食器棚を整理し、空間を作った上で、スケジュール表に食器を棚に片づける仕事をつけ加えるようにアドバイスした。母親の努力によって、これも8月初めにはできるようになったのである。

A君にとって一つの仕事が二つになったり、その仕事のバリエーションが増えていくことは抵抗のあることである。例えば、スライサーをきゅうりにも人参にも使ったり、切ったきゅうりを他の物と混ぜる仕事をつけ加えるだけでもA君にとっては大きな挑戦なのである。しかし、視覚的な図やスケジュールカードを使って、日常の必然的な家庭の場面で繰り返すことによって新しい物や活動に興味を引き出すことができるようになった。

③ 身辺自立52「箸ではさんで食べる」

身辺自立82「大皿から自分の皿に食べ物をとる」

箸の使用はビーズ・ウレタン・マカロニ等をピンセントではさむことから練習した。宝石箱の仕切に20個きちんと入れることが気に入って熱心に取り組んだ。ピンセントから箸に変えて練習し始めた頃から、食事の時も箸で食べたがるようになった。

身辺自立82の課題は、次のような場面設定で実践してもらった。つまり、A君の皿にA君の好きなものを少しだけよそい、お代わりの大皿を用意する。自分の皿の好きな食べ物を食べ終わったら他の料理が残っていても、大皿から自分の好きな食べ物を取って食べてもよいと伝えておく。他の家族も大皿から取って食べるようにする。大皿に料理を盛りつけて、そこから取って食べる機会を増やす。このような努力で、大皿から食べ物を取ることができるようになってからは、他の家族のおかずに手を出さず、大皿からお代わりを取るようになった。

④ 認知16「きかれると、自分・人形等の身体部位を1つ指さす」

A君は音声言語のみで尋ねても反応しなかった。そこで、文字付き絵カードを使用した。鼻と口は混同しやすいので、公文の大判漢字絵カードから「手」「耳」「足」を選び、カードの下に「て」「みみ」「あし」という手作りの平仮名文字カードをつけ、まず文字のマッチングを行った。つまり、文字付き絵カードを1枚机の上に置き、同じ大きさの文字カードを一枚手渡して重ねて置くように指示する。重ねたら、「手は?」「耳は?」「足は?」と尋ねて、その部位を見せたり、触ったりして模倣を促す。模倣してほしいが、最初のうちは模倣しなくてもこちらの行動を見てくれたらカードを渡してカードポストに入れてもらおう。カードポストとは絵カードが縦でも横でもすっぽり入るように上部に投入口を作った手作りの箱である。カードと投入口をよく

見ないとカードは入らないので、目と手の協応の課題ともなる。

A君の場合、音声言語のみでは指示にしたがうことが困難である。絵や文字、さらには身振りによるモデルが必要であった。さらに、終了したカードをポストに入れさせることによって課題終了のけじめをつけることが重要であったのである。

この課題を開始したのは3月29日である。4月8日にまねをして耳を触り、4月12日にまねをして足を指さすことができるようになった。そして、5月10日には絵カードを見せて、「これは？」と尋ねるだけでその部位を3箇所とも示すことができるようになったのである。

(3) 事例児A君の変化

① 受容性コミュニケーションの変化

ワークでは指示書（絵や文字で作業の内容や手順を示してある）に忠実に作業をするようになった。以前はブロックで決まった形をつくることしかしようとしなかったが、今では指示書でこちらの意図を汲み取り、指示通りの形を作ることができるようになってきている。指示書通りに作業を終えた後、にっこり笑ったり、嬉しそうな声を出すこともある。また、要求場面でしか口形模倣や音声模倣をしてくれなかったのが、「これはなあに？」という問いに対して身振りで答えようとしたり、こちらが答えを言ってあげるとその口形や音声の一部を模倣するようになった⁸⁾。

② 表現性コミュニケーションの変化

ワークや課題学習の時、自分の行動が大人の期待に応えているかどうかを確認するために、大人の反応をしっかり目を合わせて見るようになった。また、課題学習の時にできないことはクレーン（大人の手を取って代わりにさせようとする）だけでなく、視線で援助してほしいことを伝えることが増えてきた。視線だけでは周りの人が気づかない時もあるので、今後は身振りサインや「手伝ってカー

ド」（手伝ってほしいときに、ことばの代わりに示すカード）の使用を考えている。家庭での日常生活ではマカトンカードを使用して、「したいこと」「行きたい場所」を伝えることができるようになってきている。まだ、大人がA君の意図を汲み取れないと泣いたり、混乱したりすることがある。表現性コミュニケーションを豊富にしていく努力が必要である。

③ コミュニケーション・マインドの変化

母親の報告によると、A君は「夏休みの帰省中、父方の祖母とアルバムを見ながら肩を並べて何やら指さしていた。また、母方の祖母とは『はなはな遊び』で相手と同じことをして笑いあった」という。このように祖母たちと同じものを見ようとしたり、同じことをして楽しもうとする行動はこれまでには見られなかったものである。

④ 問題行動の減少

入学当初の学校は、残念ながら、構造化されていなかった。したがって、A君にとっては学校ではいつ・どこで・何を・どんな順番で・どのくらいしたらよいのか見通しがたたなかった。そのため、常同行動としてのロッキング、自傷としての顎打ち・ヘッドバンピング、逃避行動としての頻尿はもちろんのこと、ガラスを体当たりで叩き割ったり、訳もなくあちこち動き回る（多動）などの問題行動が多く見られた。

問題行動が特に顕著になるのは、①表現会の練習で授業内容が日替わりで代わる1カ月間、②交流授業で近くの学校の生徒が集団でやって来る（養護学校の子どもより多い人数が来る）日、③運動会の練習時期、④本児にとって目的の持てない長い待ち時間などである。

しかし、平成11年5月より、養護訓練担当教師の理解と努力により個別学習（週2回）の場面の構造化が実践され、本児は落ちついて学習に取り組めるようになってきた。また、担任教師も構造化に賛同し、着替えの手順を

スケジュールにそって行わせる工夫をしたり、シンボルカードによるコミュニケーションボードで欲しいものや行きたい場所を示せるようになった。平成11年10月からは教室でのワークの実践も始まっている。

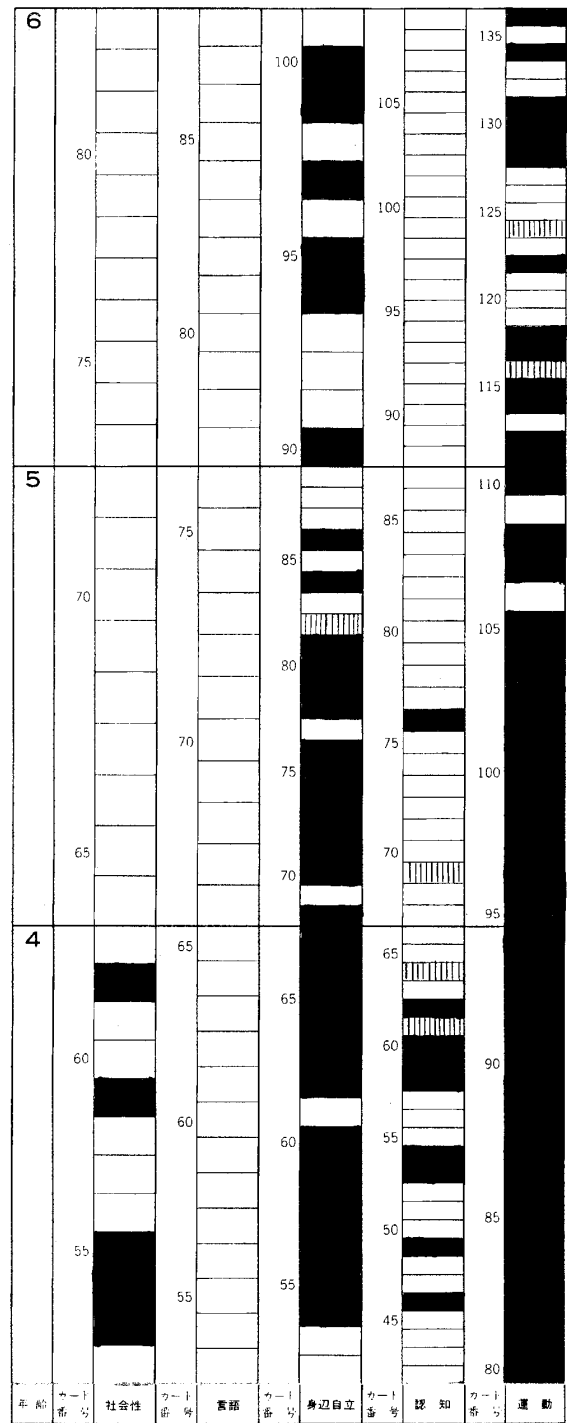
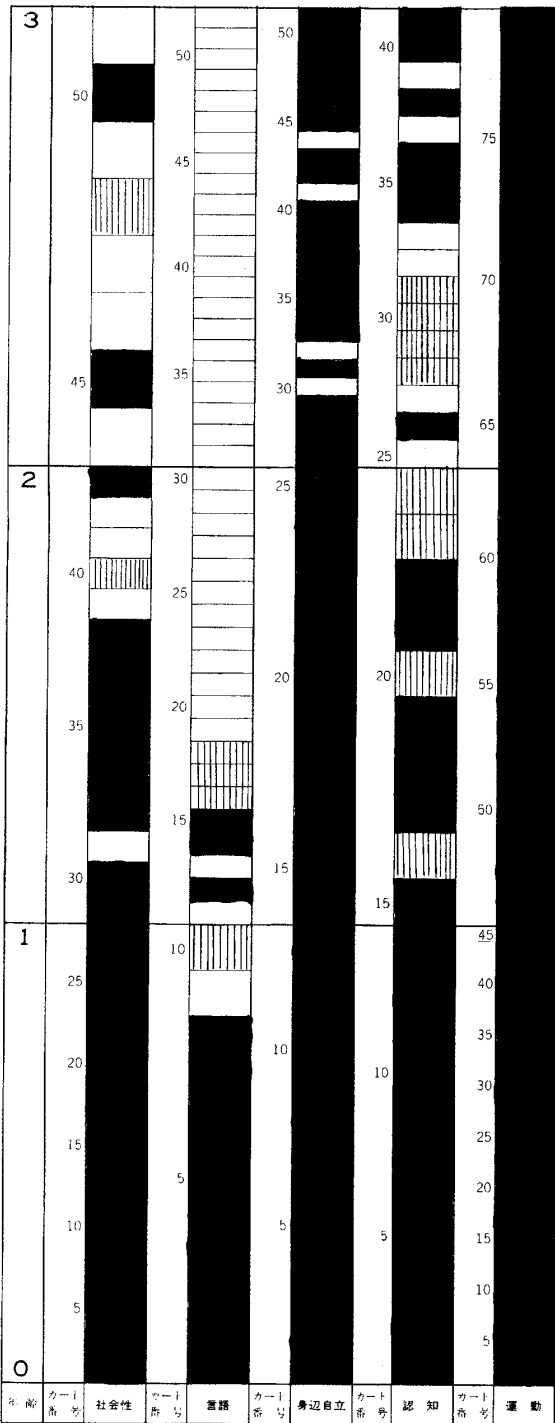
ポーターの相談室や家庭で問題行動がほとんどなかったのは構造化のアイデアによるものである⁹⁾。学校でストレスを抱えて、不機嫌な状態で帰ってきた時でも、家庭でワーク

を含むいつもと同じ日課をこなしているとだんだん落ちついてくるといふことである。

今後も相談室・家庭・学校が連携をとりながら、さまざまな構造化の工夫を重ね、学習や生活技術の向上をはかっていくことが必要である。

⑤ 発達経過表

次に、A君の発達経過表を掲げる。■は



C A. 7歳1カ月の時点での初回アセスメントの結果であり、□□□□はその後半年間で達成した課題である。自閉症児に特有のことではあるが、言語と社会性の領域に極端な遅れが見られる。

5 考察

(1) 物理的構造化の効果

既述のように、出村は自宅の限られた空間（8畳・8畳の続き和室）を構造化された環境（Structured settings）に変身させている。

物理的構造化の重要な条件は、

- ① 一つの場所では一つの活動しかしない（同一の場所を多目的に使用しない）ということ
- ② 一つの場所を他の場所と視覚的に区別できるようにすること

等である。

出村は学習する部屋（学習室）と遊ぶ部屋（プレイルーム）とを別室にした。しかも、プレイルームに柄のマットを敷いて学習室との区別を視覚的にはっきりさせている。学習室のレイアウトも見事である。ワークの机と課題学習の机を部屋の両側に対称的に配置し、おやつ用の大きな座敷机を中央に置くことによって両者をうまく具合に仕切っている。しかも、課題学習のコーナーに無地のカーペットを敷き、視覚的にもはっきり区別できるようにしている。そして、ワーク用の机はワークのためにしか、課題学習の机は課題学習をするためにしか、おやつ用の机はおやつを食べるためにしか使用しないのである。さらに、座る場所を大人用の座布団（紺色）と子ども用の座布団（動物柄）によって示し、その位置を変えないようにしているのもすばらしいアイデアである。

以上のように、出村は自宅の限られた空間を使って見事な構造化を実現しているといえる。その証拠に、スケジュールの構造化の効果とも相まって、A君は初回から何の混乱もなく、ワーク→課題学習→遊び→おやつ→帰

宅という順番で行動しているのである。

気になる点を挙げれば、課題学習の場所が窓際にあることである。戸外からの刺激で学習への集中が妨げられる子がいらないとも限らない。しかし、自宅の既存の部屋であることに鑑みればやむを得ないことであり、A君の場合はそれが障害になることはなかったのである。

(2) スケジュールの構造化の効果

物理的構造化の効果もさることながら、スケジュールの構造化はさらに大きな効果を上げている。

スケジュールを構造化するとは、活動や課題の種類や順序を視覚的に理解できるように提示するということである。その際、一人ひとりの年齢・機能・能力等に応じて、文字・絵・写真・実物のどれにするかを決定していかなければならない。

出村の用意したスケジュールポケットには、ワーク・課題学習・遊び・おやつ・帰宅の5種類の活動や課題を示す実物か絵（あるいは写真）カードが入っている。順番は上下（上から下への順番）で示されている。A君の場合最初の数回は実物が入っていたが、後には文字と絵（あるいは写真）のカードに変わっている。カードは手作りの簡単なものであるが、文字を読むことのできない自閉症児でも、色や絵（あるいは写真）で何のカードかを視覚的に区別することができるようになっていく。しかも、それぞれの場所に同じカードや対応する実物が置いてあり、手に持っているものと照合することによって、その場所が間違いなくその活動や課題をする場所であることを視覚的に確認することができるようになっていく。

この効果は絶大である。「4の(1)構造化された方法による初回の指導の様子」で述べたように、A君は戸惑うことなく、「吸い寄せられるように自発的に」所定の場所に着いたのである。

ワークや課題学習も色カードで順番や内容

を示す工夫がされている。教材の箱にカードと同じ色の封筒を貼り付けることによって、A君は安心してワークや課題を開始している。

フィニッシュボックスや図4の課題進行表、カードポストの工夫も大きい。A君は教材やカードをフィニッシュボックスに入れたり、シールを課題進行表に貼ったり、カードをポストに投入することによって一つの課題を予定通り終了したことを確認し、強化されているのである。

スケジュールの構造化はポーター相談室で有効であるのみならず、家庭でも有効であることが確認されている。スケジュールボードやスケジュールカードを作ることによって、母親はA君に一連のお手伝いをさせることに成功している。

おわりに

ポータープログラムは、ダウン症児にはすばらしい成果を上げている。しかし、自閉症児にはダウン症児に対するほどの成果を上げることができずにいる。もちろん、ポータープログラムに限ったことではなく、ワシントン大学法や他の発達遅滞乳幼児のための早期教育プログラムにおいても自閉症児の発達の偏りや遅れを軽減したり、克服するのは難しいのである。しかし、TEACCHプログラムの「構造化」のアイデアを取り入れることによって、ポータープログラムに基づく指導が自閉症児を飛躍的に発達させる可能性があることが本稿によって確かめられたのである。

本稿は、事例検討会での出村の発表に感動した白幡が、出村に共同研究を呼びかけ、それを出村が快諾したことに始まる。以来、電話や手紙の他に、二十数回に渡ってメールを交換して完成させたものである。

本稿を締めくくるにあたり、出村の実践にあらためて敬意を表する。とともに、実践のすばらしさが十分に伝わらなかったとすれ

ば、白幡の文章表現のまずきであることをあらかじめおわびしておきたい。

註

- 1) 特定非営利活動法人日本ポーター協会（会長：山口薫）の認定指導員。金沢市在住。
- 2) 白幡富夫「親のための自閉症児早期教育プログラムの開発(1)」東海女子大学紀要第16号、1997。
白幡富夫「親のための自閉症児早期教育プログラムの開発(2)」東海女子大学紀要第18号、1999。
- 3) 佐々木正美『自閉症療育ハンドブック——TEACCHプログラムに学ぶ』学研、1993、130ページ。
- 4) 達成された課題を繰り返すワークは、既習技能の熟練・知識の定着という意味でどんな子にとっても重要である。出村は自閉症児にはワークが特に重要であると考えた。達成された課題でも場や教材や時等の些細な変化で自閉症児には新しい課題と受け取られることがある。したがって、般化のためにも子どもが飽きない限り同じ課題を（少しずつ変化させることも考慮しながら）繰り返させることが必要である。慣れ親しんだ活動をしている時の自閉症児は楽しそうであり、その子なりの工夫や自発性を発揮しているのではないと思われる。
TEACCHプログラムでは、その場所で「何をするのか」「どのくらいするのか、あるいは、いつまでするのか」「終わったらどうするのか」を視覚的な刺激を活用して示すことを「ワークシステム（活動の構造化）」と呼んで重視している（朝日福祉ガイドブック『自閉症のひとたちへの援助システム——TEACCHプログラムを日本でいかすには』朝日新聞厚生文化事業団、1999、47ページ参照）。
- 5) ポータープログラムの課題は、乳児期の刺激（45項目）、社会性（83項目）、言語（88項目）、身辺自立（101項目）、認知（109項目）、運動（136項目）、合計562項目からなっている。この一つひとつの課題を分析して、1～2週間で達成可能な標的行動を設定し、相談室および家庭の課題学習とする。
- 6) 英国で開発された、言語発達に遅れのある人のための指導法。核となる語彙（330語）をスピー

チ（話しことば）、サイン（動作表現）、シンボル（略画）を併行提示する方法で指導効果を上げている。

- 7) 1、2回目は具体物、3回目は具体物とワークのシンボルカードとの両方、4回目以降はカードのみにした。

課題学習の場合も、最初の2回は具体物（木製の車の型はめの一片）、3回目は具体物とカードとの両方、4回目以降はカードのみにした。

- 8) 大人の問いに身振りや音声模倣で応えることができるようになった具体的な例を挙げる。蕎麦（食べるまね）、電話（手を耳に当てる）、車（ハンドルを動かすまね）、コップ（手を口に当て、飲むまね）、耳（「み」と発声）、足（「し」と発声）、歯ブラシ（歯を磨くまね）などである。
- 9) ポーテージ発達相談室で混乱したのは、① PEP-R検査（E.ショプラー・茨木俊夫『新訂 自閉児 発達障害児 教育診断検査——心理教育プロフィール（PEP-R）の実際』川島書店、1995参照）で課題が多かった時（7月27日、寝転がって床に頭をぶっつけて泣く）と課題学習で絵カードに動詞の文字を重ねさせた時（6月18日、カードを見て泣きだし、頭を2回ぶつ）の2回だけである。2回とも課題を中止すると混乱はまもなくおさまった。プレイルームでの自由遊びの時間に母親との相談をしているが、その時間は頻尿（最初の頃は6回位、最近は2回位）である。何をどんな順番でするかが決まっていないからだと思われる。